聖霊降臨後第 22 主日（A 年特定 25）聖餐式説教　奈良基督教会　マタイ 22:34~46、出エジプト 22:20-26「受けた愛を分かち合う― Sharing the Love We Have Received」司祭古本みさ

今朝は、日本聖公会中部教区の可児聖三一教会から、フィリピン人会衆の皆さんが来てくださいました。奈良基督教会の皆さんと共に、心より歓迎いたします。今年 3 月、京都教区海外情報部門から 8 名でフィリピンのケソン市を訪れ、フィリピン聖公会の皆さんと交流しました。今日は、その訪問で学んだことを、聖書のみ言葉と共に分かち合いたいと思います。

私たちがフィリピンを訪問して何よりも感動したのは、フィリピンの皆さんの温かさ、大らかさ、そして明るさでした。聖公会本部のミッションセンターの方々は、空港への送り迎えから食事、さまざまな施設への訪問、観光に至るまで、本当に至れり尽くせりのお世話をしてくださいました。お忙しい中、私たちのために時間をやりくりし、いつも笑顔で付き添ってくださったのです。行く先々で大歓迎を受け、街で出会う人々もとてもフレンドリーでした。私たちは、この素晴らしいおもてなしに心底感激し、その温かさはいったいどこから来るのだろうと思い巡らせました。

その答えとなるヒントの一つが、フィリピン聖公会の首座主教、ネスター・ポルティック主教との懇談でした。ポルティック主教は、以前、中部教区と姉妹教区の関係にあるフィリピン聖公会北中央教区の主教を務められ、昨年、首座主教に就任されました。大変お忙しい中、私たちのために 3 時間近くもの時間を取ってくださり、フィリピン聖公会の歴史と現状、課題、そしてこれからのビジョンについて語ってくださいました。　フィリピンは 180 以上もの民族・言語グループが存在する、多様性に満ちた国です。一方で、貧困に苦しむ地域も多くあります。そこでフィリピン聖公会が大切にしているのは、宣教とは、ただ礼拝をし、教会に人を集めることだけではないということです。まずは人々の暮らしを支え、安心して生活できる地域社会をつくること。教会が主体となり、行政とも協力しながらコミュニティーを育て、人々の生活を支える活動が進められているそうです。そうした活動を通して人と人とのつながりが生まれ、信頼が育まれ、やがて人々がイエスさまと出会い、教会につながっていくのです。

そのお話の中で、特に心に残った言葉があります。Receiver to Giver（R to G)、「受ける側から、与える側へ」という言葉です。これは、教会という組織だけが困っている人を助けるのではなく、信徒一人ひとりが自分に与えられた能力や賜物を、ほかの人のために用いていくという考え方です。これまで助けられてきた人が、今度は誰かを助ける人になっていく。自分が愛された喜びを知っているからこそ、その喜びを誰かに分かち合いたい。なるほど、これか！と思いました。

それは、お金や物を持っている人だけができることではありません。誰かの話を聞くこと、優しく声をかけること、自分の時間や知識を役立てることも、すべて与えることにつながります。使徒言行録 20 章 35 節には、「受けるよりは与える方が幸いである」というイエスさまの言葉があります。フィリピン聖公会の皆さんは、この言葉を日々の暮らしの中で生きようとしておられるのだと感じました。

もう一つ、深く心に残った出来事があります。滞在 3 日目、マニラのイントラムロスという旧市街を訪れました。スペインの植民地時代の面影を残す美しい街並みが広がる場所ですが、その中には悲しい歴史も刻まれていました。太平洋戦争中、フィリピンは日本軍によって占領され、1945 年のマニラの戦いでは、多くの民間人が犠牲となりました。私たちが訪れたサンチャゴ要塞には、日本軍の占領下で多くのフィリピンの人々が捕らえられ、拷問を受け、命を奪われた歴史を伝える地下牢が、今も残されていました。　私たちがその場所に立ち、言葉を失っていると、案内してくださったフィリピン聖公会の方が「入らなくてもいいのよ」と優しく声をかけてくださいました。そして見学を終えたときには、別

の方が「謝ったりしないでね。あなたたちのしたことじゃない。これは歴史なんだから」と言ってくださったのです。その言葉に、私は胸がいっぱいになりました。　もちろん、日本がかつてフィリピンの人々に与えた苦しみは、決して忘れてはならない歴史です。今も戦争の傷を抱えている方々がおられるでしょう。しかし、その悲しい歴史を知りながらも、私たちを温かく迎え、心遣いを示してくださった。その優しさと心の広さに、私たちは深く心を打たれました。そして、相手のことを知ろうとすること、相手の痛みに心を寄せること、過去の悲しみを忘れず、それでも新しい関係を築いていこうとすることの大切さを教えていただいたのです。

さて、今朝読まれた出エジプト記 22 章には、次のような言葉があります。「寄留者を虐待したり、圧迫したりしてはならない。あなたたちもエジプトの国で寄留者であったからである。」この言葉の背景には、イスラエルの民がエジプトで抑圧され、奴隷として苦しんでいたという経験があります。神さまは、その苦しみの叫びを聞き、彼らをエジプトから導き出してくださいました。だからこそ、イスラエルの民には、自分たちがかつて受けた苦しみを、ほかの人々に繰り返してはならないと命じられたのです。自分たちもかつて弱い立場にあり、誰かの助けを必要としていた。そのことを決して忘れてはならない、と。　この出エジプトの教えと、悲しい歴史を抱えながらも、私たちを温かく迎えてくださったフィリピンの方々の姿が、私には重なって見えました。もちろん、フィリピンの人々の温かさを宗教だけで説明することはできません。しかし、私たちが出会った方々の姿には、イエスさまが教えられた隣人愛が、日々の生活の中に息づいているように感じられたのです。

今日の福音書では、律法の専門家がイエスさまに「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか」と尋ねます。イエスさまは、二つの掟を挙げられました。「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」そして、「隣人を自分のように愛しなさい。」この二つの掟は、別々であるようで、実は深く結びついています。神さまを愛するとは、神さまが造られ、愛しておられる自分自身と、同じように神さまに愛されている隣人を大切にすることです。そして、この「隣人」とは、家族や友人、同じ国の人だけではありません。国や言葉、文化や宗教の違う人々、自分とは考え方の違う人々、時には受け入れることが難しいと感じる人々も含まれるのです。

主イエスは、そのことをご自身の生き方を通して教えてくださいました。病気の人に手を差し伸べ、罪人と呼ばれる人々と食事を共にし、社会から取り残された人々の声に耳を傾けられました。そして、今日の福音書の後半では、メシアとはいったい誰なのかを問いかけられます。メシアはダビデの子でありながら、ダビデが「主」と呼ぶお方でもある。イエスは、ただ愛について教えてくださった道徳の先生ではなく、ご自身がその愛を生き、十字架に至るまで私たちを愛し抜いてくださった救い主なのです。　私たちは誰も、最初から与える側に立っているわけではありません。誰もが神さまから命をいただき、多くの人に支えられ、助けられて生きています。誰かの言葉に励まされ、誰かの助けによって困難を乗り越えたことがあるでしょう。そして何よりも、神さまから無条件の愛をいただいているのです。だからこそ、今度は私たちが、その愛を誰かに分かち合うことができるのです。**Receiver to Giver.** 私は、この言葉をこれからも大切にしていきたいと思います。

今年の春、私たちはフィリピンの皆さんから、たくさんの愛をいただきました。そして今日、こうして奈良基督教会にフィリピンの兄弟姉妹をお迎えできたことを、心からうれしく思います。共に祈り、共に食事をし、共に笑い、互いのことを知り、親しくなる。その一つひとつが、私たちに与えられた素晴らしい賜物なのだと思います。今日の出会いが、これからも互いに支え合い、祈り合う関係へと育っていきますように。